

大都市高齢者の社会的孤立と 一人暮らしに至る経緯との関連

斉藤雅茂, 冷水 豊, 武居幸子, 山口麻衣

大都市高齢者の社会的孤立と 一人暮らしに至る経緯との関連

斉藤雅茂*¹, 冷水 豊*², 武居幸子*³, 山口麻衣*⁴

抄録 ●

本研究では、高齢者の一人暮らしに至る経緯と社会的孤立との関連、および孤立のなかでも長期孤立と短期孤立との関連を分析した。調査は、東京都板橋区の選挙人名簿から一人暮らしと思われる65歳以上の高齢者3,500人を対象にした。訪問面接法を用いたところ、面接時点で同居者がいた人を除き、1,391人の有効回答が得られた。分析には、現在と50代時の他者との交流頻度を用いて、孤立のなかでも長期孤立と短期孤立を分類した。また、配偶者や子ども等との別居時期についてクラスター分析を行い、高齢者の一人暮らしに至る主要な経緯を5つに類型化した(核家族移行型、義親同居型、子どもなし型、配偶者・子早期別居型、未婚型)。分析の結果、①性別、年齢、就学歴、経済状態、身体的障害の有無を統制したうえでも、「核家族移行型」と比較して、それ以外の経緯はすべて高齢者の社会的孤立に有意な影響を及ぼすこと、②いずれの経緯も長期孤立に対してより高いオッズ比を示すこと、とくに、③「未婚型」と「子どもなし型」の経緯は、長期孤立と短期孤立のいずれにも高いオッズ比を示すことが確認された。

Key words : 社会的孤立, 長期/短期孤立, 一人暮らしに至る経緯, ライフコース

老年社会科学, 31 (4): 470-480, 2010

I. はじめに

高齢者の社会的ネットワークに関する研究は、わが国においてもすでに数多くの蓄積がある¹⁻⁶⁾ものの、そうした社会的ネットワークが乏しい状態である社会的孤立に焦点を当てた科学的な研究はあまり報告されていない。とくに、孤立高齢者を一定数抽出することが容易ではなく、また、孤立の操作的定義自体もいまだ確立されていないなどの研究方法上の困難を伴うものの、近年では、高齢者の社会的孤立に関する研究の重要性は過小評価されるべきではないことが指摘されている⁷⁾。とりわけ、わが国は、2025年には、高齢世帯のなか

で一人暮らしがもっとも多くなる⁸⁾と推計されており、こうした高齢者の社会的孤立への関心は今後いっそう高まるものと考えられる。

高齢者の社会的孤立に関する先行研究を要約すると、主に社会老年学領域では、産業化や都市化のなかで高齢者は全般的に孤立しているのかが分析され、孤立した高齢者はごく少数であることが国内外で一致して報告されてきた⁹⁻¹¹⁾。また、これまでの研究では、性別¹¹⁾や人種¹²⁾による差異だけでなく、より高齢の人^{10, 13)}、未婚および子どものいない人¹⁴⁻¹⁶⁾、学歴が低い人¹⁶⁾ほど高齢期に孤立しやすいこと、さらに、孤立した高齢者は単に社会的ネットワークが乏しいだけでなく、経済的に困窮し^{14, 16)}、身体的・精神的に健康でない人^{10, 17-19)}が多いことが確認されている。他方で、Victor²⁰⁾らは、これまでの孤立研究の課題のひとつとして、主要な先行研究の多くが30年以上前のものであることを挙げ、高齢化や長寿化、一人暮らし高齢者

受付日: 2009. 7. 21 / 受理日: 2009. 11. 9

*1 Masashige Saito: 日本福祉大学地域ケア研究推進センター

*2 Yutaka Shimizu: 日本福祉大学大学院客員教授・研究フェロー

*3 Sachiko Takei: 上智大学大学院総合人間科学研究科

*4 Mai Yamaguchi: ルーテル学院大学総合人間学部

*1 〒460-0012 愛知県名古屋市中区千代田5-22-35

の増加や家族員の減少といった、現代の状況が反映された独自の調査に基づいて再度検証する必要があることを指摘している。

また、高齢期の社会的孤立の背景要因を明らかにするためには、高齢期だけに焦点を当てるのではなく、高齢者が経験した人生の全体に注目する必要がある。こうしたなか、欧米の社会老年学では「個人が一生の間に辿る道筋」²¹⁾に着目するライフコース概念が注目されている。なかでも、近年では、高齢期に至るまでの累積的な有利・不利(cumulative advantage/disadvantage)という観点からの理論的・実証的な研究がいくつか報告されている²²⁻²⁵⁾。しかし、これまでのところ、高齢者のライフコース研究では、高齢期の状態として経済状態や健康状態に着目したものが多く、社会的孤立の問題を扱った研究はほとんど報告されていない。また、高齢者のライフコース研究では、性別や人種、学歴や親の所得、婚姻経験などの諸変数と高齢期の状態との相関関係を分析したものが多く、本来の課題である高齢期に至るまでのプロセスと高齢期の状態との関連があまり分析されていないという課題も残されている。とくに、高齢者の社会的孤立に関しては、一部では、生涯孤立(lifelong isolate)と高齢期孤立(recent isolate)による違いが指摘されており^{17, 26)}、ライフコースとの関連で社会的孤立を分析する際には、これらの相違を考慮した分析が必要といえる。

以上の背景を踏まえて、本研究では、高齢期に至るまでのプロセスとして、配偶者や子ども、親、親戚等との別居時期に基づいて、高齢者の一人暮らしに至る主要な経緯を把握し、それらの経緯と社会的孤立との関連を分析すること、そうした一人暮らしに至る主要な経緯と高齢者の社会的孤立のなかでも長期的な孤立・短期的な孤立との関連を分析すること、の2点を目的にした。なお、孤立(isolation)の定義は、研究領域および研究者の関心によって異なる^{20, 27)}が、本研究では、Townsend¹⁰⁾の定義に即して「家族やコミュニティとほとんど接触がない」という客観的な状態を孤

立ととらえることにした。

II. 方法

調査は、2007年9～11月にかけて、東京都板橋区に居住する65歳以上の一人暮らし高齢者3,500人を対象にして訪問面接法を用いて実施した。調査対象者の選定は、2007年7月時点の選挙人名簿から系統抽出法によって行われた。その結果、面接時点で「同居者がいる」ないし「同一敷地・同一棟内に4親等以内の親族がいる」ことが確認された593人を除いた2,907人のうち、1,391人から有効回答が得られた(有効回収率=47.9%)。なお、本調査では、代理回答を認めておらず、また、最終的に調査員によって「(質問の内容を)まったく理解していない」あるいは「同居者がいて全体的に注意がそがれた」と判断された8人は有効回答から除外した。回答者の平均年齢は75.0歳(65～95歳)、性別は男性が27.2%、女性が72.8%であった。

1. 孤立の操作的定義

本分析では、孤立状態を操作的に定義するために、社会的ネットワークの交流頻度に着目した。具体的には、家族、友人や近所の人を含めて、現在会って話したり、電話や手紙(電子メールやFAXを含む)のやりとりをしている「親しい人」を最大で10人まで挙げてもらい、その1人ひとりについて、直接会ったりいっしょに外出する頻度(対面接触頻度)と電話や手紙のやりとりをする頻度(非対面接触頻度)を月または年単位の実数でたずねた。この質問によって、無回答の32人を除く、1,359人の回答者から5,852人の他者との交流に関する情報が得られた。本分析では、それらの親しい人々との対面接触頻度の合計、および、非対面接触頻度の合計のいずれもが、月に1回程度(年に7～23回)以下の人、および、親しい人が1人もいない人を「孤立」に分類した。その結果、146人(10.7%)が「孤立」、1,213人(89.3%)が「非孤立」に分類された(表1)。

次に、孤立のなかでも長期的な孤立と短期的な

孤立を分類するために、高齢期以前の社会的ネットワークの様態に着目した。具体的には、50代のころに限定したうえで、その当時に別居していた子・子の配偶者・孫、親戚（きょうだいや甥・姪を含む）、近所の人、友人・知人、介護・福祉サービスや相談窓口の職員とどの程度会って話したり、電話や手紙などのやりとりをしていたかをそれぞれ「まったくなかった」から「非常によくあった」の5件法でたずねた。なお、ここでは、50代時の職場関係の同僚等は友人・知人に含め、そのほかに、少数だが生活保護や介護等の専門職との関係を想定して福祉関係の相談窓口の職員を加えた。本分

析では、上記の「孤立（146人）」のうち、これらすべてに「あまりなかった」あるいは「まったくなかった」と回答した48人を長期孤立、いずれかに「非常によくあった」「よくあった」「ときどきあった」と回答した95人を短期孤立に分類した。すべてまたは一部に無回答で分類不能な3人は、この分析時には除外した。

表1 従属変数の分布 ()内は%

現在の孤立状態	
非孤立	1,213 (89.3)
孤立	146 (10.7)
合計	1,359 (100.0)
50代時の交流頻度(孤立のみ: n=146)	
まったくなかった/あまりなかったの割合 ^{a)}	
別居子・子の配偶者・孫 ^{b)}	119 (83.8)
親戚	84 (59.6)
近所の人	92 (65.2)
友人・知人	83 (57.6)
福祉等の相談窓口職員	137 (97.2)
孤立状態の分類 ^{c)}	
長期孤立	48 (32.9)
短期孤立	95 (65.1)
不明	3 (2.0)
合計	146 (100.0)

a) いずれの回答も不明を除く。

b) 子どもがいない場合、「まったくなかった」に含めた。また、同居者がいた場合、「あまり/まったくなかった」から除外した。

c) 孤立のうち、50代時の交流頻度がすべて「あまりなかった/まったくなかった」人を長期孤立、それ以外を短期孤立に分類した。

2. 一人暮らしに至る経緯と統制変数

一人暮らしに至る経緯については、配偶者、子ども、自分の親、きょうだい、配偶者の親・親戚と最後に別居した時期に着目し、それぞれ「同居したことがない」「20歳代以前(幼少・青年期)」「30～50歳代(壮年・中年期)」「60歳代以降(高齢期)」に分類した。なお、配偶者とは60歳代以降(44.8%)、子どもとは30～50歳代(46.0%)、自分の親ときょうだいとは20歳代以前(それぞれ75.4%、78.2%)、配偶者の親や親戚とは同居したことがない(79.6%)がもっとも多かった(表2)。

また、統制変数として、表3に示した性別、年齢、就学歴、経済状態、身体的障害の有無を用いた。なお、就学歴については「短大・大学卒」「高校卒」「中学校卒以下」に分類し、短大・大学卒を基準にしたダミー変数として用いた。経済状態については、昨年の世帯収入を「1=120万円未満」「2=120～180万円未満」「3=180～240万円未満」「4=240～300万円未満」「5=300万円以上」に分類し、連続量として用いた。また、身体的障害の有無については、聴力、視力、歩行能力に着目し、「耳もとで大きい声で話さないと聞こえない」または「まったく(ほとんど)聞こえない」[1メ

表2 統制変数の最後に別居した時期

	配偶者	子ども	自分の親	きょうだい	配偶者の親や親戚
同居したことがない	253 (18.4)	462 (34.0)	13 (0.9)	89 (6.5)	1,076 (79.6)
20歳代以前	37 (2.7)	19 (1.4)	1,034 (75.4)	1,078 (78.2)	95 (7.0)
30～50歳代	469 (34.1)	625 (46.0)	257 (18.7)	199 (14.4)	142 (10.5)
60歳代以降	615 (44.8)	253 (18.6)	68 (5.0)	12 (0.9)	39 (2.9)
合計	1,374 (100.0)	1,359 (100.0)	1,372 (100.0)	1,378 (100.0)	1,352 (100.0)

表3 統制変数の割合と平均値

	全体 n=1,391		男性 n=378	女性 n=1,013
	割合/平均 (SD)	最小~最大値	割合/平均 (SD)	割合/平均 (SD)
性別 (女性の割合)	72.8%	0~1	—	—
年齢	75.0 (6.5)	65~95	73.4 (6.2)	75.6 (6.5)
学歴：短大・大学卒	17.4%	(基準)	24.7%	14.7%
高校卒	42.1%	0~1	33.2%	45.4%
中学校卒以下	40.5%	0~1	42.2%	39.9%
経済状態	2.6 (1.3)	1~5	2.8 (1.4)	2.5 (1.3)
身体的障害 (ありの割合)	18.3%	0~1	16.1%	19.2%

ートルぐらいの距離に近づいても顔の輪郭程度しかみえない]または「まったく(ほとんど)みえない」,「介助があれば歩けるまたは車いすであれば移動できる]または「まったく(ほとんど)外出はできない」のいずれかに該当した人を「障害あり」,それ以外を「障害なし」に分類した。

3. 分析方法

分析に際しては、はじめに、各高齢者の一人暮らしに至る主要な経緯を把握するために、配偶者、子ども等の統柄別に最後に別居した時期を投入したクラスター分析(非階層的クラスタリング、K平均法)を行った。あらかじめクラスター数を3~6の間で設定し、クラスター数別の集中度の平均値、最大値、最小値を参考にしながら、最終的には、投入した諸変数についてクラスター間での記述統計の相違に基づいて、もっとも解釈可能な分類を採用した。次に、上記の統制変数を投入して、一人暮らしに至る主要な経緯を独立変数、孤立状態(1=孤立, 0=非孤立)を従属変数にした二項ロジスティック回帰分析を行った。最後に、同モデルについて、従属変数の孤立を長期孤立と短期孤立に分類し、非孤立を参照カテゴリーにした多項ロジスティック回帰を行った。解析にはSPSS12.0Jを用いた。

III. 結果

1. 高齢者の一人暮らしに至る経緯の類型化

非階層的クラスター分析の結果、各統柄と最後に別居した時期という一人暮らしに至る主要な経緯は、5クラスターがもっとも解釈可能な分類となった。表4は、得られた5つのクラスターの特徴を確認するために、この分析に投入した変数および一人暮らしの期間について、クラスター別に集計した結果である。

まず、経緯1に該当した高齢者は、ほぼ全員(92.4%)が配偶者の親や親戚との同居経験がなく、約8割の人が20歳代以前に自分の親ときょうだいと別居していた(それぞれ81.6%、83.6%)。その後、子どもとは約7割の人が30~50歳代に別居し、すべての人が配偶者と60歳代以降に別居(主に死別)していた。とくに、この経緯は、すべての人が高齢期に至るまで配偶者と同居していた点の特徴であり、これを「核家族移行型」とした。なお、この経緯は、壮年期に至る以前に親と別居し、その後結婚して、中年期に子どもと別居、高齢期に配偶者と別居(死別)するという典型的なファミリー・ライフサイクルの軌道を示しており、一人暮らし高齢者のなかでも、31.2%ともっとも多くの人が該当した。一人暮らしの期間の平均は8.0年ともっとも短かった。

同様に、経緯2に該当した高齢者についてみると、主に幼少・青年期に自分の親およびきょうだ

表4 一人暮らしに至る主要な経緯(続柄別の別居時期)

()内は%

	経緯1 核家族移行型	経緯2 義親同居型	経緯3 子どもなし型	経緯4 配偶者・子 早期別居型	経緯5 未婚型
配偶者	60歳代以降 (100.0)	30~50歳代 (38.9) 60歳代以降 (60.5)	30~50歳代 (51.1) 60歳代以降 (48.9)	30~50歳代 (94.3)	同居経験なし (92.0)
子ども	30~50歳代 (67.6) 60歳代以降 (32.4)	30~50歳代 (51.5) 60歳代以降 (25.1)	同居経験なし (93.3)	30~50歳代 (78.6)	同居経験なし (97.9)
自分の親	20歳代以前 (81.6)	20歳代以前 (81.4)	20歳代以前 (70.8)	20歳代以前 (82.4)	20歳代以前 (57.6) 30~50歳代 (33.6)
きょうだい	20歳代以前 (83.6)	20歳代以前 (83.8)	20歳代以前 (75.3)	20歳代以前 (82.4)	20歳代以前 (63.9) 30~50歳代 (27.7)
配偶者の親や親戚	同居経験なし (92.4)	30~50歳代 (79.0) 60歳代以降 (21.0)	同居経験なし (92.7)	同居経験なし (90.3)	同居経験なし (90.3)
該当数	408 (31.2)	167 (12.8)	178 (13.6)	318 (24.3)	238 (18.2)
一人暮らし年数	8.0±6.4	11.9±10.2	16.5±12.4	19.6±10.4	35.3±17.0

はほかと比較して特徴のある部分を示す

いと別居し、壮年・中年期に配偶者の親や親戚、子どもと別居し、高齢期に配偶者と別居していた。この経緯は、壮年・中年期の間に配偶者の親や親戚と同居していた点に特徴があり、「義親同居型」とした。この経緯には、一人暮らし高齢者の12.8%が該当した。

経緯3に該当した高齢者は、大半が子ども、および配偶者の親や親戚との同居経験がなく、20歳代以前に自分の親やきょうだいと別居し、その後、30~50歳代または60歳代以降に配偶者と別居していた。この経緯は、子どもとの同居経験がない(子どもがいない)点に特徴があり、「子どもなし型」とした。この経緯には、一人暮らし高齢者の13.6%が該当した。

経緯4に該当した高齢者は、配偶者の親や親戚との同居経験がなく、20歳代に自分の親やきょう

だいと別居したあと、主に30~50歳代に配偶者と子どもと別居していた。この経緯は、多くが壮年・中年期に配偶者と子どもと別居している点に特徴があり、「配偶者・子 早期別居型」とした。この経緯には、一人暮らし高齢者の24.3%が該当した。

最後に、経緯5に該当した高齢者は、20歳代以前または30~50歳代に自分の親およびきょうだいと別居し、その後、配偶者や子ども、配偶者の親・親戚との同居経験がない人々であった。この経緯は、主に幼少・青年期に親・きょうだいなどの親族と別居後、だれとも同居したことがないという特徴があり、「未婚型」とした。この経緯には、一人暮らし高齢者の18.2%が該当し、一人暮らしの期間の平均は35.3年と最も長かった。

表5 二項/多項ロジスティック回帰分析の結果

要因	カテゴリー	孤立 ^{a)}		長期孤立 ^{b)}		短期孤立 ^{b)}	
		B ^{c)}	オッズ比	B ^{c)}	オッズ比	B ^{c)}	オッズ比
性別	男性 (ref.女性)	1.427***	4.167	1.325***	3.761	1.498***	4.475
年齢	65~95	-.006	.994	-.019	.981	.003	1.003
学歴	短大・大学卒 (ref.)						
	高校卒	-.117	.889	.226	1.253	-.216	.806
	中学校卒以下	.306	1.358	1.441*	4.224	-.247	.781
経済状態	1~5	-.207*	.813	-.134	.875	-.246*	.782
身体的障害	障害あり (ref.なし)	.472 [†]	1.603	.476	1.609	.505 [†]	1.657
一人暮らし経緯	核家族移行型 (ref.)						
	義親同居型	.810 [†]	2.248	1.574 [†]	4.826	.713	2.041
	子どもなし型	1.493***	4.449	2.374**	10.740	1.338**	3.813
	配偶者・子 早期別居型	.659 [†]	1.933	1.951*	7.033	.231	1.260
	未婚型	1.896***	6.661	2.708***	14.997	1.767***	5.855
モデル適合度	Hosmer & Lemeshowの検定より $\chi^2=1.7$ n.s. (df=8)		-2対数尤度=738.5 (切片のみ=875.5) $\chi^2=137.0$ *** (df=20)				

*** $P < .001$, ** $P < .01$, * $P < .05$, [†] $P < .10$

a) 従属変数は 1=孤立, 0=非孤立. 263ケースが分析から除外され, Nagelkerkeの擬似 $R^2=.204$ であった.

b) 参照カテゴリーは非孤立. 265ケースが分析から除外され, Nagelkerkeの擬似 $R^2=.204$ であった.

c) 値は非標準解.

2. 一人暮らしに至る経緯と社会的孤立との関連

表5は、一人暮らしに至る経緯を独立変数、孤立・非孤立を従属変数にした二項ロジスティック回帰分析の結果である。HosmerとLemeshowの適合度検定の結果をみると、 $\chi^2=1.7$ ($p > .10$, $df=8$)であり、求めた回帰モデルはデータに適合していることが示された。

分析結果をみると、男性であること、所得が低いこと、身体的な障害があることは、高齢期の孤立状態に有意な影響を及ぼしていた。オッズ比によれば、男性のほうが4.167倍、身体的な障害があるほうが1.603倍、孤立状態になりやすいという結果であった。経済状態については、カテゴリーが1ポイント下降するにつれ1.230倍(0.813の逆数)孤立しやすいう結果であった。

また、以上の諸変数の影響を統制したうえでも、核家族移行型を基準にして、それ以外のすべての一人暮らしに至る経緯は、孤立状態に対して統計的に有意な影響を及ぼすことが確認された。オッズ比によれば、未婚型のほうが6.661倍、子どもなし型のほうが4.449倍、義親同居型のほうが2.248

倍、配偶者・子早期別居型のほうが1.933倍、高齢期に孤立状態になりやすいという結果であった。

3. 長期孤立と短期孤立の差異

長期孤立と短期孤立の差異については、多項ロジスティック回帰分析の結果によれば、切片のみのベースライン・モデルよりも、独立変数を投入したモデルのほうがモデルの当てはまりがよく、 $\chi^2=137.0$ ($p < .001$, $df=20$)であったため、「独立変数を含むモデルのパラメータは、母集団においてもすべて0である」という帰無仮説は棄却された。

分析結果をみると、男性であることは、長期孤立と短期孤立のいずれにも有意な影響を及ぼしていた。また、長期孤立には、一人暮らしに至る経緯と合わせて、学歴が有意な影響を及ぼしていた。さらに、短期孤立と比較して長期孤立に対しては、一人暮らしに至る経緯が示すオッズ比の値は大きく、未婚型のほうが14.997倍、子どもなし型のほうが10.740倍、長期孤立になりやすいという結果であった。その一方で、短期孤立に対しては、一人暮らしに至る経緯のなかでも、未婚型と子ども

し型のみが有意な影響を及ぼしていた。また、経済状態と身体的障害は、短期孤立にのみ有意な影響を及ぼしていた。とくに、経済状態については、年収が「300万円以上」の人よりも「120万円未満」の人のほうが2.676倍(0.782の逆数の4乗)短期孤立になりやすいという結果であった。

IV. 考 察

1. 社会的孤立の属性的な要因

本分析によれば、他の変数を統制したうえでも、性別は孤立に有意な影響を及ぼし、男性のほうが長期孤立と短期孤立のいずれにも該当しやすいことが示された。高齢者の孤立と性別との関連についてTunstall¹¹⁾は、女性のほうが高齢期に孤立しやすいが、男性のほうが孤立した際に極端な孤立になりやすいと指摘していた。本研究では、親しい人との対面・非対面接触のいずれもが月に1回以下という「極端な孤立」に近い状態に着目したため、孤立高齢者に男性が多いという結果は、そうした指摘と矛盾しないものと考えられる。また、本結果は、これまでに指摘された男性は退職後に社会的ネットワークを縮小させ、女性は高齢期にも多方面のより柔軟な社会的ネットワークをもつ傾向にある^{1, 3)}という知見に対して、そうした関係が必ずしも高齢期からだけではないことを示唆している。本結果によれば、男性の場合、退職前の中年期において、職場での付き合いが一定以上あったとしても、「親しい人」に限定するとすでに孤立傾向にある可能性が高く、高齢期以前から社会的孤立を軽減するための取り組みが重要であると考えられる。

年齢との関連については、これまでの研究では、より高齢の人のほうが孤立しやすいとされてきた¹⁰⁾が、本分析では、他の変数の影響を統制すると、年齢の高低は高齢者の社会的孤立に有意な影響を及ぼさないことが示された。これは、より高齢であるほど社会的ネットワークが縮小するというのは一種のステレオタイプであることを示唆している。とくに、加齢に伴う友人関係の変化の

多くは、加齢そのものというより、退職、死別、健康問題などの加齢に伴う状況的な変化が関連していること²⁸⁾が、現在の日本の高齢者にも当てはまることを示すものといえる。

また、学歴との関連については、学歴というライフコースの早い段階の経験は、高齢者の社会的孤立のなかでも、高齢期からの短期孤立には有意な影響を及ぼさず、中年期からの長期孤立にのみ有意な影響を及ぼすことが確認された。これは、これまでに示された学歴の低い人のほうが高齢期の社会的ネットワークが乏しい^{4, 5, 16)}という関係とおおむね符合するものである。しかし、その場合に、低学歴であることは、高齢期からの社会的ネットワークの乏しさというよりも、中年期から高齢期に継続する社会的ネットワークの乏しさと関連していることを示唆している。なお、本分析では、こうした関連が低学歴のほうが同年齢の人々が集まる友人形成の機会が少ないという素朴機会仮説と教育そのものが友人形成に有利に働く資質を養成するという人的資源制約仮説²⁹⁾のいずれによるものかは特定できない。しかし、少なくとも、本研究で分析した都市居住の高齢者をみる限りでは、低学歴というライフコース初期の経験が、中年期から高齢期まで継続する社会的孤立を規定する不利な資源となりうることを示されたといえる。

これに対して、高齢期の経済状態と健康状態については、高齢者の社会的孤立のなかでも、短期孤立に対してのみ有意な影響を及ぼすことが示された。すなわち、高齢期に低所得であること、あるいは身体機能に障害を抱えていることは、高齢期において他者との関係を維持・形成するうえでの阻害要因になることが改めて確認されたといえる。これは、前述した先行研究^{10, 15, 17-19)}の知見とおおむね一致するものであり、とくに、高齢期のこれらの状態が、中年期からの孤立ではなく高齢期からの孤立と関連している点で時系列的にみても矛盾しない結果といえる。

2. 一人暮らしに至る経緯との関連

次に、本分析では、性別、年齢、学歴などの諸変数を統制したうえで、一人暮らしに至る経緯は、高齢者の社会的孤立に有意な影響を及ぼし、いずれの経緯もとくに長期孤立に対して高いオッズ比を示すことが確認された。すなわち、現在、一人暮らしをしている高齢者のなかでも、その一人暮らしに至る経緯によって孤立状態に陥るリスクが異なり、ファミリー・ライフサイクルで描かれるような「核家族移行型」を基準にして、それ以外の軌道はすべて高齢期の社会的孤立に対する一定のリスクがあることが示された。これは、家族キャリアの不安定さと高齢期の社会的ネットワークの乏しさとの関連²⁾を定量的な分析から追認しただけでなく、とくに、高齢期以前からの長期的な孤立状態は、上記の学歴と合わせて、高齢期に一人暮らしに至るライフコースの軌道と密接に関連していることを示唆するものと考えられる。

また、一人暮らしに至る経緯のなかでも、「子どもなし型」と「未婚型」は、長期孤立と短期孤立の両方に有意な影響を及ぼし、他の経緯と比較しても、孤立に対してかなり高いオッズ比を示すことが確認された。子どもとの関係については、海外においても、子どものいない人のほうが高齢期に孤立しやすいことが確認されている^{15, 16)}が、とりわけ、家族規範が強いとされる日本の高齢者は、親戚・友人・近隣者等との関係の比重が軽く、配偶者を除くと子どもとの関係を極端に重視している^{1, 3)}とされている。このため、とくに日本の場合には、婚姻経験があっても子どもがおらず、配偶者と離別・死別後に一人暮らしになったという経緯は、高齢期に重要な子どもとの関係が得られないことから、社会的孤立に陥りやすい軌道のひとつであると考えられる。

同様に、未婚と孤立との関連については、未婚の人のほうが高齢期に孤立しやすいとされ¹⁴⁾、本分析においても、男性であっても女性であっても、未婚で親元を離れてから高齢期に至るまで一人暮らしを続けてきたというコースに該当することが、

高齢者の社会的孤立と密接に関連することが示された。とくに、上記の「子どもなし型」と比較しても、「未婚型」のほうが高いオッズ比を示していたことから、一人暮らし高齢者のなかでも、未婚であるということ自体が高齢期に至るまでの孤立状態に陥るリスクをとくに高める経験であることを示唆している。これは近年、わが国において、男女共に生涯未婚率が急増していることを考慮すると、今後、孤立状態に陥るリスクの高い高齢者が急増する可能性があることを示唆するものと考えられる。

さらに、本分析では、「義親同居型」もまた高齢者の孤立に有意な影響を及ぼしていた。なお、この経緯に該当した高齢者の9割(167人中151人)が女性であり、実質的には、婚姻後、夫の親と同居したケースと考えられる。すなわち、この結果は、上記の子どもなしと未婚のほかにも、主に女性の場合には、配偶者の親との同居経験が、高齢期の社会的孤立と関連する可能性があることを示唆している。とくに、長期孤立に対して高いオッズ比を示していたことから、女性にとって配偶者の親との同居が、高齢期に至る以前の社会的ネットワークを形成・維持するうえで何らかの不利な条件になりうることを示唆している。本分析では、そのメカニズムを明らかにすることはできないが、たとえば配偶者の親と同居することによって、女性自身が自由な時間をつくりにくい、あるいは、友人・知人のほうが誘いを躊躇しがちになるといったことが予想される。この点については、今後、事例調査などを通じてさらに検討する必要がある。

3. 分析の限界と今後の課題

最後に、本分析の限界として、第一に、本分析では、ライフコースのなかでも特定の統柄との別居時期を取り上げたのみであり、たとえば、失業経験や破産経験、家族・友人間でのトラブルなどの特殊なライフイベントの経験とその時期の影響を分析していない。とくに、実際には高齢者のライフコースのプロセスは累積的な有利・不利が示すよ

うな単純な軌道ではない²⁵⁾と指摘されており、本分析のモデルにおいて説明率が低かった原因のひとつに、そうした多様なライフイベントを考慮していない点が影響していると考えられる。これらについては、今後異なる方法を用いた調査を通して、さらに分析を深める必要がある。

第二に、本結果は、大都市居住者を対象にしたものであり、より一般化した知見を得るためには、他の特性をもつ地域において同様の調査を実施する必要がある。とくに、社会的孤立と地域特性との関連については、いまだ必ずしも一致した知見が得られておらず^{30, 31)}、今後は、異なる特性をもつ地域に対象を拡大し、同様の分析を行う必要があると考えられる。

本研究は、平成19～20年度科学研究費助成金(代表:冷水 豊)によって実施された研究成果の一部である。本調査にご協力いただいた東京都板橋区のおよそ100名の方のみなさまと板橋区おとしより保健福祉センターのみなさまに御礼申し上げます。

文 献

- 1) 玉野和志, 前田大作, 野口裕二ほか:日本の高齢者の社会的ネットワークについて. *社会老年学*, 30: 27-36 (1989).
- 2) 藤崎宏子:高齢期の社会的ネットワーク.(藤崎宏子著) 高齢者・家族・社会的ネットワーク, 11-52, 培風館, 東京(1998).
- 3) 野辺政雄:高齢者の社会的ネットワークとソーシャル・サポートの性別による違いについて. *社会学評論*, 50 (3): 375-392 (1999).
- 4) 古谷野巨, 西村昌記, 安藤孝敏:都市男性高齢者の社会関係. *老年社会科学*, 22 (1): 83-88 (2000).
- 5) 原田 謙, 浅川達人, 斎藤 民ほか:インナーシティにおける後期高齢者のパーソナル・ネットワークと社会階層. *老年社会科学*, 25 (3): 291-301 (2003).
- 6) 小林江里香, 杉原陽子, 深谷太郎:配偶者の有無と子どもとの距離が高齢者の友人・近隣ネットワークの構造・機能に及ぼす効果. *老年社会科学*, 26 (4): 438-450 (2005).
- 7) Findlay RA: Intervention to reduce social isolation amongst older people; Where is the evidence? *Ageing and Society*, 23: 647-658 (2003).
- 8) 国立社会保障・人口問題研究所:日本の世帯数の将来推計;平成15年10月推計(2003).
- 9) 金子 勇:都市高齢者のネットワーク構造. *社会学評論*, 38: 336-350 (1987).
- 10) Townsend P: Isolation, loneliness, and the hold on life. In *The Family life of old people; An inquiry in East London*, ed. by Townsend P, 188-205, Penguin Books, London (1963).
- 11) Tunstall J: Old and alone; A sociological study of old people. Routledge and Kegan Paul. London (1966).
- 12) Locher JL, Ritchie CS, Roth DL, et al.: Social isolation, support, and capital and nutritional risk in an older sample; Ethnic and gender differences. *Social Science & Medicine*, 60 (4): 747-761 (2005).
- 13) Victor C, Scambler S, Bond J, et al.: Being alone in later life; Loneliness, social isolation and living alone. *Reviews in Clinical Gerontology*, 10: 407-417 (2000).
- 14) Wenger GC, Davies R, Shahtahmasebi S, et al.: Social isolation and loneliness in old age; Review and model refinement. *Ageing and Society*, 16(3): 333-358(1996).
- 15) Wenger GC, Burholt V: Changes in levels of social isolation and loneliness among older people in a rural area; A twenty-year longitudinal study. *Canadian journal of aging*, 23 (2): 115-127 (2004).
- 16) Krause N: Neighborhood deterioration and social isolation in later life. *International Journal of Aging & Human Development*, 36 (1): 9-38 (1993).
- 17) Lowenthal MF: Social isolation and mental illness in old age. *American Sociological Review*, 29 (1): 54-70 (1964).
- 18) Weinstein BE, Ventry IM: Hearing impairment and social isolation in the elderly. *Journal of Speech & Hearing Research*, 25 (4): 593-599 (1982).
- 19) Simonsick EM, Kasper JD, Phillips CL: Physical disability and social interaction; Factors associated with low social contact and home confinement in disabled older women. *Journal of Gerontology: Psychological sciences and social sciences*, 53B (4): s209-s217 (1998).

- 20) Victor C, Scambler S, Bond J, et al. : Being alone in later life ; Loneliness, social isolation and living alone. *Reviews in Clinical Gerontology*, **10** : 407-417 (2000).
- 21) Giele JZ, Elder G : Methods of life course research ; Qualitative and quantitative approaches, Sage Publications, Thousand Oaks, Calif (1998). (正岡寛司, 藤見純子訳: ライフコース研究の方法; 質的ならびに量的アプローチ. 明石書店, 東京, 2003).
- 22) Crystal S, Shea D : Cumulative advantage, cumulative disadvantage and inequality among elderly people. *The Gerontologist*, **30** (4) : 437-443 (1990).
- 23) Schieman S : Age, education, and the sense of control; A test of the cumulative advantage hypothesis. *Research on aging*, **23** (2) : 153-178 (2001).
- 24) Ferraro KF, Thorpe RJ, McCabe GP, et al.: Color of hospitalization over the adult life course ; Cumulative disadvantage in black and white ? *Journal of gerontology ; Psychological sciences and social sciences*, **61B** (6) : s299-s306 (2006).
- 25) O'Rand AM : Cumulative advantage theory in life course research. *Annual review of gerontology & geriatrics*, **22** : 14-30 (2002).
- 26) Bennett R : The concept and measurement of social isolation. In *Aging, isolation and resocialization*. ed. by Bennett R, 9-26, Van Nostrand Reinhold, New York (1980).
- 27) Weiss RS : The study of loneliness. In *Loneliness ; The experience of emotional and social isolation*, ed. by Weiss RS, 8-29, MIT Press, Cambridge (1973).
- 28) Atchley RC, Barusch AS : Social forces and aging ; An introduction to social gerontology. 10th ed., Wadsworth/Thomson Learning, Belmont (2004).
- 29) 松本 康: 都市度, 居住移動と社会的ネットワーク. *総合都市研究*, **52** : 43-78 (1994).
- 30) Fischer CS : To dwell among friends ; Personal networks in town and city. The University of Chicago press, Chicago (1982). (松本 康, 前田尚子訳: 友人のあいだで暮らす. 未来社, 東京, 2002).
- 31) 後藤昌彦, 山崎治子, 飯村しのぶほか: 都市における高齢者の社会的孤立. *高齢者問題研究*, **7** : 73-90 (1991).

Relationship between the trajectory of living alone and social isolation of the elderly in an urban area

Masashige Saito ¹⁾, Yutaka Shimizu ²⁾, Sachiko Takei ³⁾, Mai Yamaguchi ⁴⁾

1) Nihon Fukushi University Research Promotion Center for Community Care

2) Nihon Fukushi University

3) Sophia University

4) Japan Lutheran College

The purpose of this paper is to examine the relationship between the trajectory of living alone and social isolation of the elderly. The subjects were 1,391 elderly (aged 65 and over) individuals living alone in Itabashi Ward of Tokyo who responded positively to an interview. In order to distinguish long-term isolation from short-term isolation, the frequency of contacts with intimate relationships between middle-age and the present were used. In addition, the trajectory of living alone by the elderly was classified into 5 types : shifted to a nuclear family, lived with parents-in-law, childless, early separation, unmarried, applying a cluster analysis concerning the timing when the elderly came to live separately: for example, spouse, children, or parents. The major findings were as follows: 1) in comparison with “shifted to a nuclear family” type, the other trajectories of living alone significantly affected the social isolation of the elderly, even after the effects of sex, age, education, income, and physical disabilities were controlled : 2) the odds ratio regarding these trajectories influencing the social isolation were significantly higher in long-term isolation than in short-term isolation ; 3) in these trajectories, the “unmarried” type and “childless” type indicated significantly higher ratios for social isolation of the elderly.

Key words : social isolation, long-term / short-term isolation, trajectory of living alone, life course